

1 奇祭の島。もぐりこもうとして早々に見つかって金責め。

石田はジャーナリストである。

と言っても、会社勤めではない。

フリージャーナリスト。何かネタを拾ったら、それを会社に売る、もしくはそれで得や損をする人間に売る。

そんな風に生きている人間。

年齢は四十。

元々タバコの害を告発する騒動を描いた映画を見て感動し、ジャーナリストを目指した。

メディアに入りたかったが、失敗した。

いや、ランクの低いところなら入れた。

が、半端に勉強が出来たので、プライドが邪魔をした。

一様、一流の会社に入った。

いずれ転職すればいいと考えた。

しかしまったくの異業種では難しいと気づく。

夢を諦めるか、フリーでやるか。

半端に貯金があったので、フリーでやってみようと考えてしまった。

そして、半端に成功したため、いつの間にか引き返せない年齢になっていた。

そうして、半端に食っている。

今日は、祭りに来ていた。

うさぎ島の南に浮かぶ小さな島。

人口数百という島に、小さな神社があり、そこが主催する古い祭りがある。

祭りには二段階あり、一段階目は誰でも参加できるが、二段階目は男子禁制だという。

石田は良く知らないが、そんな禁制の祭りぐらいいくらでもあるのではないかと思っていた。

そんな祭りに取材を頼まれた理由はいくつかある。

一つは、他の土地から隔絶された島にある祭りであり、カメラなどの持込が禁止されていて表の祭りさえ謎に包まれているということ。

そしてもう一つは。

一人の女が石田に近付く。



少し変わった巫女服の女。

烏帽子に刀を佩いている。

ショートカットの美人だが、
特に目立つのが着物の胸元を
押し上げる肉のバレーボール二個だ。

歩くだけでバレーボールを
揺らしながら、話しかけてくる。

少し変わった巫女服の女。

烏帽子に刀を佩いている。

ショートカットの美人だが、特に目立つのが着物の胸元を押し上げる肉のバレーボール二個だ。

歩くだけでバレーボールを揺らしながら、話しかけてくる。

「お祈りは済ませましたか？」

——巨乳巫女の島か……

そうネットで噂されていた。

祭りはともかく、それ以外のときはカメラ禁止でもない。

実際、この島の巫女とされる画像はネット上に上がっている。

大体が、かなりの美形でグラドル以上の巨乳の持ち主ばかりだ。

神社のご利益は子宝を授かるというものであるが、乳の出もよくなるとも言う。

その副産物で、巫女が巨乳化するというしょうもない話もある。

祭りは小さな神社の周りで、屋台を出したりやぐらを立てたりと、ごく普通に行われていた。

拍子抜けもいいところだが、メインは男子禁制の方だ。

「あの、祭りっていつまで」

「そろそろ終わりですよ。それで、申し訳ありませんけど……」

「ああ、後の祭りは男子禁制で」

「はい。申し訳ありません。心苦しいです」

女人禁制だと何だかんだうるさい世の中だが、男が割りをくうぶんにはどうでもいい……

そんな妙な風潮があるが、巨乳巫女はそれを漫然と受け入れるたちではないようだった。

女人禁制に風当たりが強い以上、いつ男子禁制にも火の粉が飛んでくるかわからない。

それを警戒し、できるだけ穏便に行きたいというのが伝わってくる。

「それじゃ、そろそろ帰ります」

「また来年もいらしてくださいね」

離れる。

少しして振り返ると、同じような格好の女たちと話をするのが見えた。

どうやら、ある程度地位が高い巫女のようなようだった。

ふと、何か引っかかる。

懐から、ネットに上がっていた明治時代の写真のコピーを出す。

昔神社に調査に来た学者が撮ったというものだ。
明治時代らしいヒゲの男たちの中に、巨乳巫女が一人立っている。
今見た巫女とほとんど同じ顔や背格好。
当時の神主、海野恵理沙だという。
——子孫か。そっくりだな。
石田には似すぎている気がした。が、子孫以外のどういう関係があるのか。
懐に戻し、神社から離れる。
屋台ややぐらから聞こえる喧騒が遠くなる。
周りを確認し、横の守に入る。
神社は森を切開く形で、そこから出る道も左右が森だ。
そこに入って、とりあえず待つ。
客が帰り始める。
それらを見送ってから、慎重に神社のほうに戻る。
20人ほどの巫女と、100人ぐらいのそこそこ若い女たちが並んでいる。
巫女の列から、一人飛び出して何か話している。
先ほど話した巨乳巫女だ。
巫女というより、この神社の神主なのかもしれない。
巫女たちが神社に向かって歩き始める。
その向こうの森の中が奇祭の舞台のようだ。
森の中を進む。
しばらくいくと、声をかけられる。
「神罰が下るぞ」
女の声。
みると、髪が長い巨乳の巫女が立っていた。若い。
高校をでてすぐ位ではないか。
「あ、いや、迷って……はぐっ」
パン。
軽い音を立てて、巫女の掌が石田の股間を打つ。
肉玉二つが巫女の手が作ったカップの中に入り、衝撃を余すところなく受ける。

顔が強張る。誤魔化そうと作りかけた愛想笑いは吹き飛び、二度とそういう顔は出来ないのではないかと思った。打たれたのは肉玉である。

だが腹も痛ければ、目もちかちかする。

男の最大の急所を攻撃されたのだと嫌でもわかる体の変化だった。

「んぐうう」

「キ○タマ痛いかな？　これが神罰だ」

グニグニと、ジーパンの上から肉玉を握る巫女。

「こんな所に、知らずに来たとは言わせないぞ」

「ち、違う。迷って……」

「あ、道に迷ったんですか！」

手を離す巫女。

「そ、そうなん……おぐっ！」

「信じるわけないでしょうが！　クソキ○タマ潰れても知らないよ！」

掌底。

先ほどより勢いよく打ち込んでくる。もちろん男の泣き所に。

一度打たれたので、今は手で押さえていた。

それでも衝撃が伝わる勢い。

——き、キ○タマばかり狙いやがって……女は遠慮がねえ……

肉玉が縮む。

竿も縮み、腰に減り込むほどだ。

急に巨乳巫女が「お詫びにやらせる」といって脱ぎだしても、とても立ちそうにない。

腹が締め付けられる。

気が遠くなるが、倒れたりしないのでまだましな状態だとは石田は思う。

「とりあえず、カメラ持ってないか確かめさせてもらおうよ」

「ま、待ってくれ。そうだ、金払う……」

笛を吹く巫女。

同じぐらいの年のやはり巨乳の巫女が数人集まってくる。

「美樹、その人誰？」

「祭りに忍び込もうとしたから、キ○タマ潰したの」

「嘘?!」
「叩いただけ。でも、潰れても治るでしょ」
ナノ医療の発達で、タマぐらい一日で治るといのは有名な話だ。
だがそれで、潰していいとか、潰されても平気という話にはまったくならない。
「それじゃ、カメラ調べさせてもらうから」
股間を押さえている。
両手を掴む左右の巫女。
ジャンパーのポケット、ジーパン。
デジカメが二つ見つかる。ICレコーダーもだ。
「こりゃ、ジャーナリストだな」
「そうとも限らないんじゃない?」
「そうよ。ただ覗き野郎かも」
覗き。
不名誉な誤解だが、そう思われたほうがいいのか。
いや、警察に突き出されても困る。
ともかく、パンツの後ろに隠したカメラが見つからないでよかった。
「覗きね……それなら騒ぐ必要もないな」
「そうね、さっさと放り出せばそれで終わりね」
それは願ってもない。
「そうなんだ、実はネットで……」
「三四回キ〇タマ蹴って放り出すか」
縮む。
すでに二回も急所攻撃受け、肉玉の痛みはまだ治まらない。
この上、両手を捕まえられた状態で三四回蹴られるなど男でいられるか不安だ。
一つぐらい潰れかねない。
治るとはいえ、銀行口座の暗証番号が誰かに変えられていたと気づいたときのように底知れない恐怖を感じる。
「ま、待ってくれ。違うんだ」
「じゃあジャーナリストかな。まだ何か持ってるんじゃないか?」
と、うなづく美樹。
「そうだ、身体検査しよう」

「もう一回？」

「ちがう、もっと徹底的に」

いって、今度はゆっくりと優しく、掌で押さえる。

石田の肉袋を。

「全部見て、検査だ」

石田の股間を押す、巨乳巫女。

「チ○チ○まで、丸出しにして調べてやるよ」

優しく、肉玉を揉み上げる。

滑り止めの高校に全部落ちたときのように、目の前が真っ暗になる石田。

見られたくない。

普通でもそうだろうが、石田は普通より特に見られたくない理由があった。

何とか、特に女に見せたくない理由があった。

彼は、かなりの短小の上に包茎と言う三重の十字架を背負っているのだ。

それをうら若い巨乳の巫女たちに見られるなど想像したこともない窮地だ。

しかも彼に気を使ったりする理由などない状況と来ている。

そんな状態で、一方的に裸に剥かれ、相手は普段どおりの格好で見てくる。

今まで考えたこともない状況だった。

——何言われるかわからねえぞ。

短小でも女を抱いてきて、ちゃんとイカせられることを実地で学んでいる。

だから表面上は、短小包茎など気にしていない顔ができる。

しかし……

心の底からの克服など、不可能だと石田は内心では思っていた。

なぜなら、どう考えようと彼の一物は小さいのだから。

体験版終わり

続きが気になった方はぜひ製品版を。